Universal Approximation Theorem of Neural Network

数理科学科 3 回生 小泉 孝弥

概要

機械学習という単語を一言で説明するならば、「関数近似器」である。今回の ReMakers の機関紙では機械学習および第3次人工知能ブームの火付け役となった「深層学習」を数学的に定義し、深層学習の中心となる「ニューラルネットワーク」が万能関数近似器であることを示す。なお、本機関紙の前提知識は数学科3回生レベルの数学である。

人工知能・AI について

現在,人工知能 (Artificial Intelligence)の厳密な定義は完成しておらず,専門家の中でも意見が分かれている。なので、この機関紙では人工知能の定義について触れることはせず、現在の,人工知能の中心技術である「機械学習」について説明する.

1.1 機械学習·深層学習

最初に述べたとおり、機械学習 (Machine Learning) とは関数近似器である。もう少し詳細に述べれば、入力空間と呼ばれる集合 \mathcal{X} から出力空間と呼ばれる集合への良い写像 $f:\mathcal{X}\to\mathcal{Y}$ を構成するのが機械学習である。 機械学習は主に、株価などのあるものの値を予想するモデルである「回帰 (Regression)」、あるものがどのクラスに属しているかを予測するモデルである「分類 (Classify)」の 2 つに分けられる。機械学習の中でも特に、あとで定義する、ニューラルネットワークというものを用いる学習手法を深層学習 (Deep Learning) という。

1.2 深層学習と万能近似性

深層学習は以下の定理から万能関数近似器と呼ばれている.

Theorem. (万能関数近似定理)

X を集合とし $f: X \to \mathbb{R}$ を性質の良い関数とする. この時, f を任意の精度で近似できるようなニューラルネットワークが存在する.

今回の機関紙の目標はこの定理を証明することであるが、今のままでは曖昧な単語が多すぎるため、数学の問題として扱うことができない。したがって、今からこの定理を数学的に述べなければならない。しかしながら、流れの都合上この定理を数学的に述べる前に、この定理の証明に不可欠な

「ハーン・バナッハの拡張定理」と「リースの表現定理」を証明することにする.

2 関数解析の基礎

リースの表現定理およびハーンバナッハの拡張定理は共に関数解析学 (Functional Analysis) と呼ばれる分野の定理である. したがって, この節では関数解析学の基礎事項を説明する. なお, ベクトル空間の係数体は実数体または複素数体とし, K で表記する.

Definition 2.1. (ノルム空間)

V をベクトル空間とする. 写像 $\|\cdot\|:V\to\mathbb{R}$ が以下の性質を満たすとする.

- 1. $\forall v \in V, ||v|| \ge 0$,
- $2. \ \forall v \in V, \|v\| = 0 \iff v = 0,$
- 3. $\forall \alpha \in \mathbb{K}, \forall v \in V, ||\alpha v|| = |\alpha| ||v||$ and
- 4. $\forall v, w \in V, ||v + w|| \le ||v|| + ||w||$.

この時, $\|\cdot\|$ を V のノルムといい, $(V, \|\cdot\|)$ をノルム空間 (normed space) という.

Theorem 2.2. $(V, \|\cdot\|)$ をノルム空間とする. この時, 以下で定義される写像 $d: V \times V \to \mathbb{R}$ は V 上の距離となる.

$$d(x,y) = ||x - y||.$$

この距離を、ノルムから入る距離と呼ぶ.

Proof. ノルムの定義より明らかである.

この定理より、ノルム空間はノルムから入る距離によって距離空間となる.次にバナッハ空間を定義していく.

Definition 2.3. (完備)

(X,d) を距離空間とする. X の任意のコーシー列 $\{x_n\}_{n\in\mathbb{N}}$ が収束する時, (X,d) を完備距離空間 (complete metric space) または単に, 完備 (complete) という.

Definition 2.4. (バナッハ空間)

ノルム空間が距離空間として完備である時, バナッハ空間 (Banach space) という.